

第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会次第

日 時：平成27年8月6日（木）

9：30～11：30

場 所：西陣織会館 第1談話室

1 開会

2 挨拶

3 制度説明

“京都をつなぐ無形文化遺産”制度について

4 議事

“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」の検討

5 閉会

【配布資料】

①次 第

②名 簿

③配席図

④資 料

資 料 1	“京都をつなぐ無形文化遺産”制度
-------	------------------

資 料 2	第1回審査会の論点
-------	-----------

資 料 3	きもの文化
-------	-------

参考資料1	西陣織帯出荷量推移等 等
-------	--------------

参考資料2	“京都をつなぐ無形文化遺産”「京・花街の文化」選定書
-------	----------------------------

“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会委員名簿

(委員長及び副委員長以外は五十音順, 敬称略)

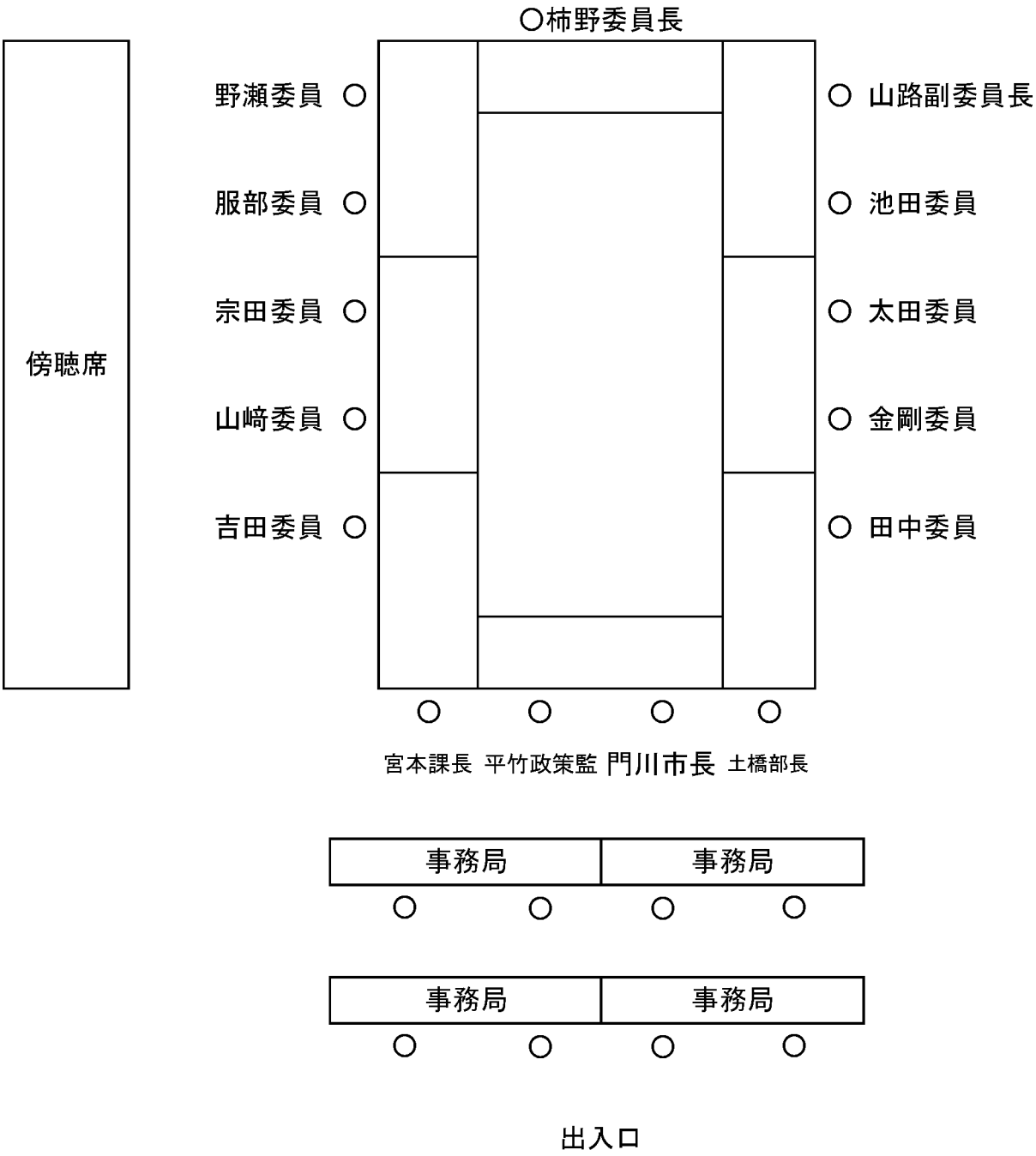
	氏 名	役 職
委員長	柿野 欽吾	京都産業大学理事長
副委員長	山路 興造	京都市文化財保護審議会委員
委員	池田 佳隆	(公財)京都和装産業振興財団理事長 京友禅協同組合連合会理事長
委員	井上 安寿子	京舞井上流
委員	太田 達	(公財)有斐斎弘道館代表理事
委員	金剛 育子	(公財)金剛能楽堂財団業務執行理事
委員	田中 京子	市民公募委員
委員	野瀬 兼治郎	京都織物卸商業組合理事長
委員	服部 正毅	西陣織工業組合副理事長
委員	藤井 浩一	(特非)きものアルチザン京都理事長
委員	宗田 好史	京都府立大学生命環境学部教授
委員	山崎 さちよ	市民公募委員
委員	吉田 満梨	立命館大学経営学部准教授

(※ 井上委員, 藤井委員は御欠席)

第1回“京都をつなぐ無形文化遺産”「きもの文化」審査会配席図

日時:平成27年8月6日(木)9:30～11:30

場所:西陣織会館 第1談話室



① “京都をつなぐ無形文化遺産” 制度の趣旨

資料1

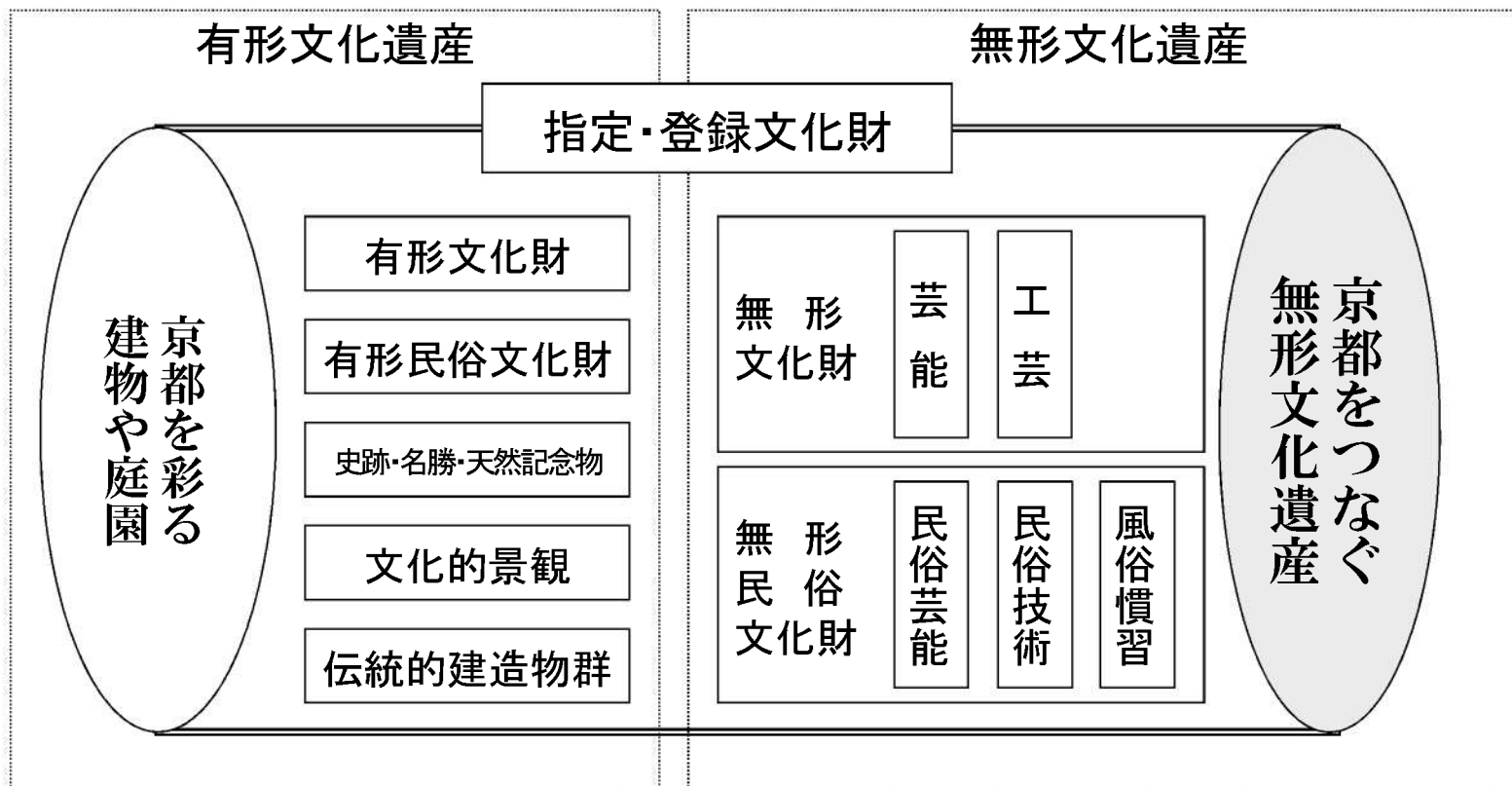
- ▶ 京都には、時代とともに変容しながらも、世代を越えて暮らしの中で伝えられてきた数多くの無形文化遺産があるが、定義や概念、保存団体が不明確であることなどから、現行の法令上、文化財としての指定・登録が困難なものもある。
- ▶ そこで、それらの価値を再発見、再認識し、内外に魅力を発信するとともに、大切に引き継いでいこうという市民的気運を盛り上げるため、平成25年度、京都市独自の仕組みとして「“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」を創設した。

これまでの
選定

- ・ 平成25年10月 「京の食文化」
- ・ 平成26年3月 「京・花街の文化」
- ・ 平成26年11月 「京の地蔵盆」

②制度の対象

京都において世代を越えて暮らしの中で継承されている無形の文化遺産を対象とし、有識者等で構成する審査会において選定する。



③今回の選定候補について

- ▶ 「京の地蔵盆」に続く選定候補については、パブリックコメントの結果を元に、審査会からいただいた答申で示された「季節感を大切にする京都の年中行事」、「火の文化」、「人生の節目に行う行事」、「きもの文化」、「京菓子」等の中から、きものの素晴らしさを認識し、維持継承していこうという気運を盛り上げるため、「きもの文化」に決定した。

(審査会答申から抜粋)

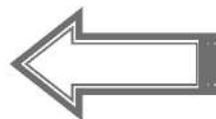
日常の衣食住に関するものとしては、きもの文化を挙げることができる。晴れ着として着る機会が少なくなったが、その美しさや素晴らしさが見直されている着物のほか、まつりなどに着られる浴衣などもある。きもの文化は、つなぎたい大切な文化であり、選定にあたっては、着物そのものだけでなく、着付け、作法のほか、着物が映える美しい町並みや染め織りの技法まで、広く捉えてもよいだろう。

④「きもの文化」選定スケジュール

- ▶ 第1回審査会（平成27年8月）
選定範囲，価値，課題等について意見交換



- ▶ 第2回審査会（平成27年9月予定）
選定案について意見交換



パブリック
コメント

- ▶ 第3回審査会（平成27年12月予定）
選定答申



普及啓発



第1回審査会の論点

- 1 「きもの文化」の範囲や対象について
- 2 「きもの文化」の現状や課題について
- 3 「きもの文化」の価値や魅力について

きもの文化

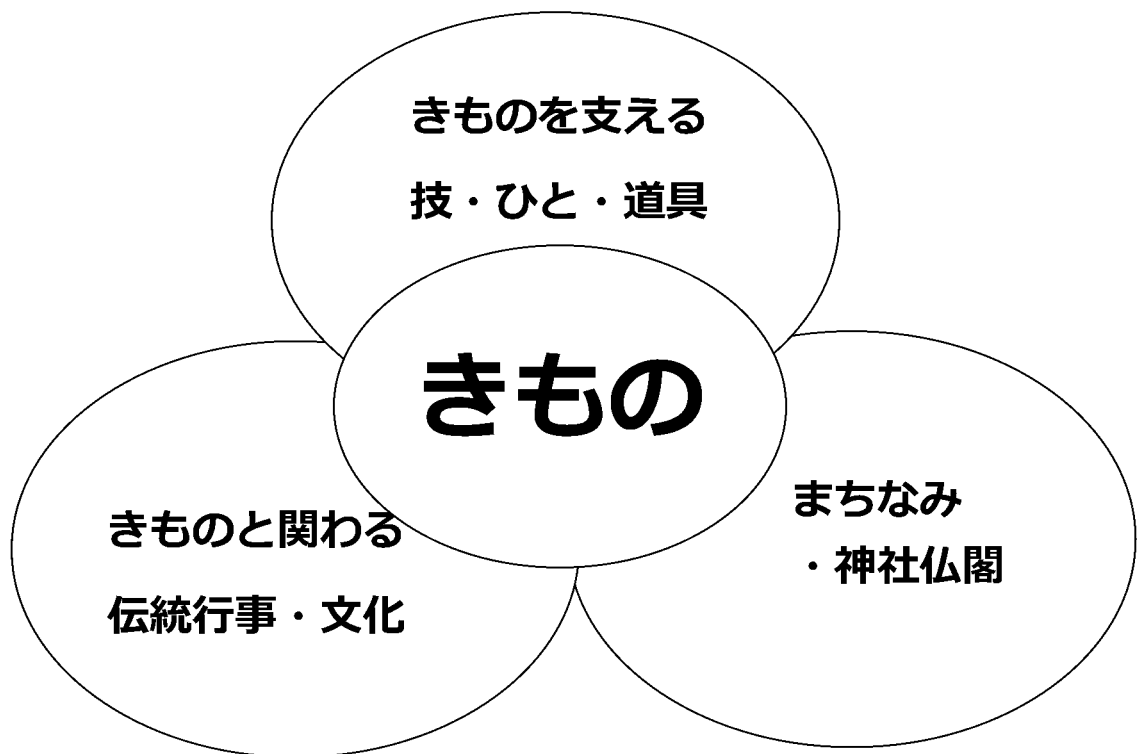
京都におけるきもの文化

きものは長い歴史の中で受け継がれてきた、日本が世界に誇る民族衣装です。「着物」は、「洋服」に対する言葉として、「和服」を指して用いられ、今では「kimono」として国際的に通用する言葉になっています。

きものは、宗教や茶道、華道、香道、能・狂言といった、我が国固有の文化とともに、発展してきました。現在でも、京都には、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元、花街、町家など、「和」の文化の源泉が存在しており、京都は日本のきもの文化の中心となっています。

また、京都では、平安時代からの宮廷を中心とした「みやびの文化」の広がりとともに、様々な技術・技法・意匠を用いた手工業が発達し、集積してきました。なかでも、京都の伝統産業を代表する「西陣織」は、平安京に設けられた「織部司」がもととなっており、その高い技術は世界的に認められています。「京友禅」は染色技術が発達した江戸時代に創案され、その華麗な意匠と優れた技術は、憧れとなっています。

これらの生産工程は、多品種少量の高級品生産に応えられるよう、分業が著しく発展しているのが特徴です。



きもの文化の維持・継承における課題

- ・生活様式の変化等に伴う消費の低迷、後継者の不足など
- ・購入及び着用することが少なくなったことに伴う消費者がきものの知識を習得する機会の減少（品質と価格、TPO に合わせたきものの格式、帯や小物のコーディネートなど）
- ・業界、市民、行政などが、それぞれの立場で考える、きもの文化の維持・継承に向けた更なる取組
→ 効果的な普及啓発の取組
など

きものの魅力、京都におけるきものの魅力、市民に伝えたいきものの魅力

選定項目（案）

1 きもの

項目	構成要素例
きものの歴史	平安時代の束帯・十二単（宮廷文化）、武家社会の直垂・小袖、小袖からきものへ
きもの、帯の種類	訪問着、色無地、小紋、羽織、袴など 丸帯、袋帯、なごや帯、角帯など
小物の種類	帯締、帯揚げ、半衿、足袋、草履、下駄など
季節、行事のきまり	袷、単衣、紵、紗など、柄や色、冠婚葬祭

2 きものを支える技・ひと・道具

項目	構成要素例
京都で育まれた技	平安京における織部司、西陣のまちのおこり、宮崎友禅斎など
文化財、伝統産業としてのきもの	重要無形文化財保持者（人間国宝） 伝統工芸品の品目（西陣織、京鹿の子絞、京友禅、京小紋、京くみひも、京縫、京黒紋付染など）
特徴的な分業体制・技法	分業体制 西陣織（図案→紋意匠図→紋紙→製織→・・・） 京友禅（図案→下絵→糸目糊置→伏せ糊置→・・・） 流通（集散地問屋→・・・） その他（和裁、着付け）
高度な技術	各工程の特化した技術、技術の習得、伝統工芸士、複雑な商品知識
道具類、原材料	織機、杼、刷毛、絹糸、染料など

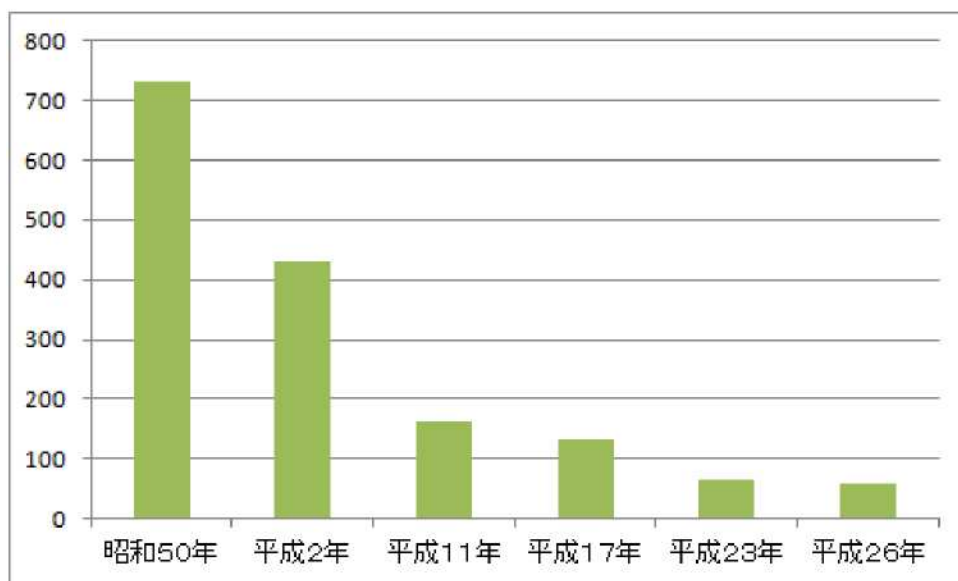
3 きものに関わる伝統行事・文化

項目	構成要素例
きものに関わる 伝統行事・文化	儀式・行事（宮参り、七五三、十三参り、卒業式、成人式、結婚式、葬儀、正月、仕事始め、祭など） 文化・芸術（茶道、華道、能・狂言など）

4 まちなみ・神社仏閣

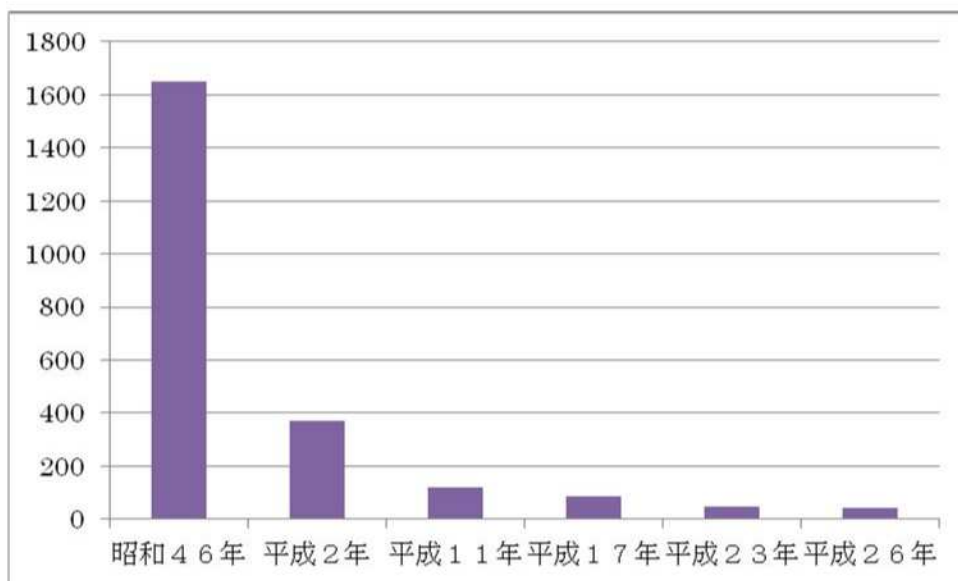
項目	構成要素例
きもの文化を育むまち	西陣、室町、堀川・鴨川
きものの似合うまち	神社仏閣、町家、花街など

西陣織帯出荷量推移（単位：万本）



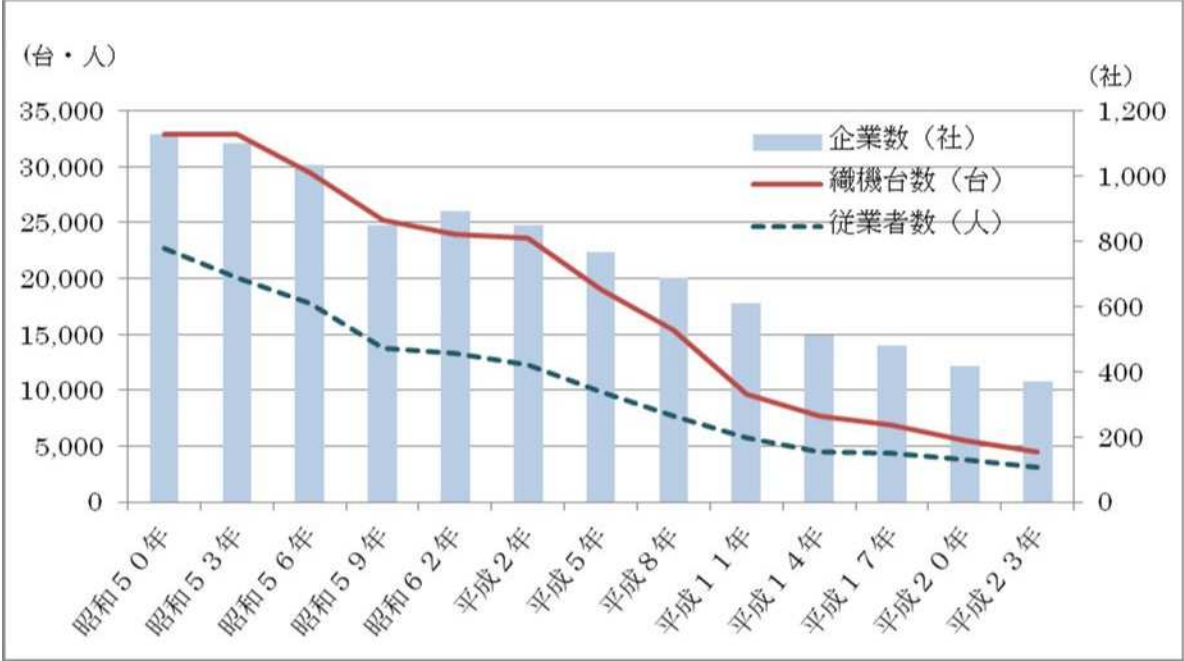
（※出典「西陣生産概況」から）

京友禅生産量（単位：万反）



（※出典「京友禅京小紋生産量調査報告書」から）

西陣織の企業数・織機台数・従業者数の推移



(※出典「第20次西陣機業調査報告書」から)

“京都をつなぐ無形文化遺産”

「京・花街の文化－いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」

平成 26 年 3 月

京都市

【選定にあたって】	2
【五花街と島原の魅力＜イメージ図＞ 】	3
【五花街 ～祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東～ 】	4
伝統伎芸とおもてなしの担い手「芸妓」「舞妓」	4
花街が継承する伝統伎芸	5
花街を支える「ひと」「わざ」「もの」	6
花街に伝わる伝統行事	8
花街のまちなみ	10
花街のおもてなし	11
＜各花街の紹介＞	12
【もう一つの花街 ～島原～ 】	13
（参考資料）花街の位置図，五花街のお茶屋件数・芸妓舞妓人数の推移	15

【選定にあたって】

芸妓や舞妓が舞・踊りをはじめとした数々の伝統伎芸により心のこもったおもてなしをする文化が連綿と受け継がれているまち、そして、京都の伝統文化が大切に守り続けられているまち「花街（かがい）」。京都の花街は、おもてなし文化の一大中心地として栄えてきた。

現在の京都には、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の花街（これら五つの花街を総称して「五花街」と呼ばれている。）があり、長い歴史の中で育まれてきた京都の伝統文化の粋（すい）をもって客をもてなす文化を大切に守り続けている。また、かつて六花街の一つに数えられていた島原は、太夫文化を伝えるまちとして独自の存在感を示している。

五花街では、芸妓や舞妓が、春秋の公演を一つの目標にしながら、日々、舞・踊りをはじめとする芸事の習練を積み重ねるとともに、茶道などの伝統文化の習得に励んでいる。そして、彼女らを引き立てるきものなどの装いは、伝統工芸の職人や髪結い師、着付師など、多くの匠のわざによって支えられている。また、始業式など花街独自の行事のみならず、節分のお化けといった風習を継承するとともに、時代祭など京都の伝統行事に参加するなど、京都の伝統文化を大切に守り続けている。

そして、洗練された伝統伎芸を披露する歌舞練場をはじめ、座敷でおもてなしするお茶屋、舞妓らが生活しながら花街のしきたりを学ぶ置屋、芸妓と舞妓が芸を磨く女紅場（にょこうば）などの稽古場、そして、宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋などが集まり、風情あるまちなみを維持しながら、まち全体が協働して花街の文化を育んでいる。

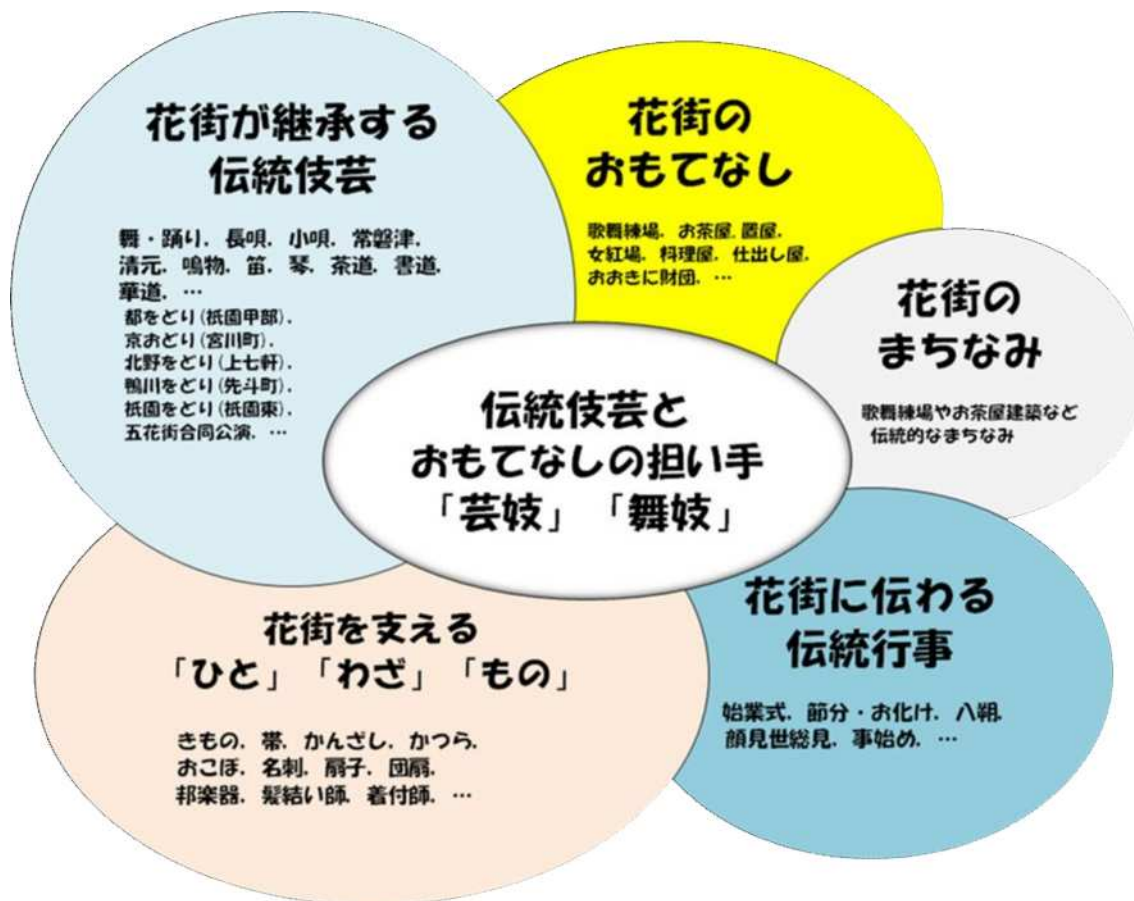
このように、京都の花街には、伝統伎芸をはじめとする伝統文化とおもてなしの文化が凝縮しており、本物へのこだわりを大切にしながら育まれたその華麗で洗練された文化は、日本国内からだけでなく、海外からも高い評価を受けている。

しかしながら、伝統伎芸とおもてなしの担い手である芸妓が年々減少し、また、その愛らしい姿が京都の花街の象徴にもなっている舞妓のなり手不足も危惧されている。さらに、お茶屋や置屋などの減少は、花街のおもてなし文化のあり様に関わる問題であると同時に、風情あふれるまちなみの維持にとって課題となっている。また、もてなされる側の伝統伎芸に対する理解不足も指摘されているところであり、伝統伎芸などの伝統文化に対する関心の低下は、花街だけでなく京都の文化全体の問題としてとらえる必要がある。

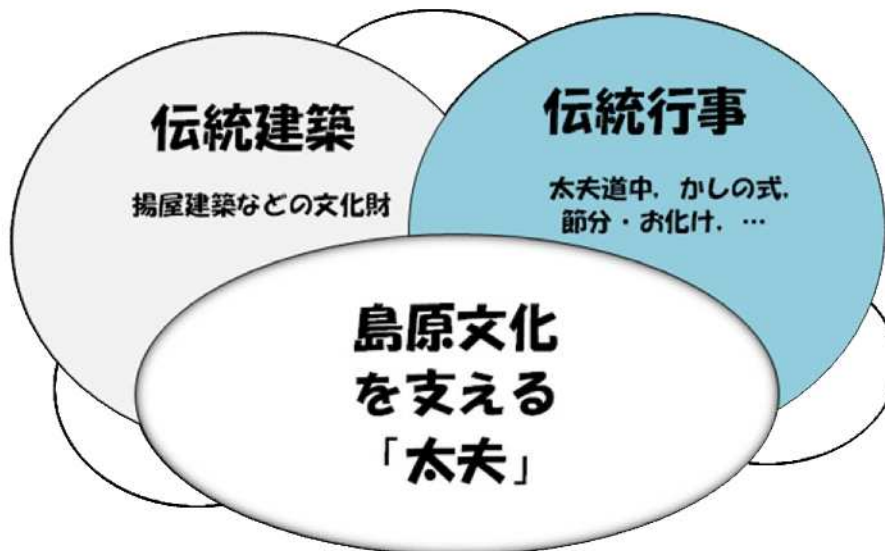
こうした現状を踏まえ、京都の文化の一翼を担ってきた花街の価値を見つめ直し、花街の文化を継承していくことの大切さを再認識するとともに、その魅力を内外に発信するため、「京・花街の文化～いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」を、“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

【五花街と島原の魅力】

< 五花街 ～祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東～ >



< もう一つの花街 ～島原～ >



【五花街 ～祇園甲部，宮川町，先斗町，上七軒，祇園東～】

項 目	内容・特徴
伝統伎芸と おもてなし の担い手 「芸妓」 「舞妓」	伝統伎芸を受け継いでいくため，芸妓や舞妓は厳しい稽古を積み重ね，座敷の客からの励ましを糧に，また，各花街の公演や五花街合同公演を一つの目標にしながら，日々，芸に磨きをかけている。 舞妓になるためには，置屋に住み込み，手伝いをしながら，舞・踊りなどの芸事や作法，京ことばなどを習得し，ある程度身に付くと，実際に座敷に出る見習い期間を経て，店出し（舞妓としてお披露目すること）し，その華やかな姿で座敷に彩りを添える。舞妓になった後も，芸事などの稽古を積み重ね，衿替え（芸妓※としてお披露目すること）する。 そして，公演や座敷で，磨き上げた芸と併せて，その艶やかな美しさと優雅で洗練された所作で客をもてなす。 ＜舞妓から芸妓への道筋＞ <pre> 仕込み → 見習い → （店出し） → 舞 妓 → （衿替え） → 芸 妓 </pre> ※ 芸妓は，舞・踊りを主にする立方（たちかた），或いは唄や三味線，鳴物などの演奏を受け持つ地方（じかた）として，得意な芸事に更に磨きをかける。
	＜現状と課題＞ 芸事や作法の習得など，厳しい稽古の日々が続くが，伝統伎芸とおもてなしの担い手としてやりがいのある芸妓や舞妓。しかしながら，華やかな舞妓だけに憧れる女性も多く，芸妓とならずに舞妓でやめてしまうケースや，芸妓となっても，置屋から独立することによる資金面の不安などから，自前とならずにやめてしまうことも多い。京都の花街では，芸妓の減少などにより，伝統伎芸の継承者の確保が課題となっている。

花街が
継承する
伝統伎芸

芸妓や舞妓は、一流の師匠の指導の下、稽古場※などで舞・踊り、長唄、小唄、常磐津、清元、鳴物（小鼓、大鼓、太鼓）、笛、琴などの芸事に精進するほか、茶道、書道、華道などの教養を身につける。

舞踊公演は、1872 年（明治 5 年）の京都博覧会に訪れる客へのおもてなしとして開催された「都をどり」（祇園甲部）と「鴨川をどり」（先斗町）に続き、1950 年（昭和 25 年）初演の「京おどり」（宮川町）、1952 年（昭和 27 年）初演の「北野をどり」（上七軒）、同年初演の「祇園をどり」（祇園東）、と各花街で続けられている。

1994 年（平成 6 年）に平安建都 1200 年を祝う催しとして開催された五花街合同公演は、京都の初夏の風物詩ともなっている。

また、芸妓や舞妓の習い事の一つである茶道は、花街のおもてなしの重要な要素であり、礼儀作法の基本として、大切に受け継がれ、舞踊公演時などに設けられる茶席では、芸妓や舞妓が点前などで客をもてなしている。

このように、京都の各花街においては、伝統伎芸をはじめとする伝統文化が継承されている。

※ 稽古場は各花街にあり、そのうち八坂女紅場学園（祇園甲部）、東山女子学園（宮川町）は学校法人となっている。

＜流派と公演＞

花街名	流派	公演
祇園甲部	京舞井上流	都をどり、温習会
宮川町	若柳流	京おどり、みずゑ会
先斗町	尾上流	鴨川をどり、水明会
上七軒	花柳流	北野をどり、寿会
祇園東	藤間流	祇園をどり

＜五花街合同の公演＞

公益財団法人京都伝統伎芸振興財団 （おおきに財団）主催	五花街合同公演「都の賑い」
--------------------------------	---------------

＜現状と課題＞

伝統伎芸を深く楽しむためには、観る側の文化的素養も必要であるが、今日、舞・踊り、邦楽などに触れる機会が少なく、日本の伝統伎芸を鑑賞して理解できる人が減少してきている。子どもの頃から日本の伝統伎芸に触れる機会を増やすなど、すそ野を広げていく取組が求められる。

花街を支える 「ひと」 「わざ」 「もの」	芸妓や舞妓を引き立てる髪型やきもの、三味線や笛などの邦楽器、さらに、舞台や座敷を飾るしつらえなどには、髪結い師、着付師のほか、きものや帯、かんざしなどを作る伝統工芸の職人の「わざ」が凝縮している。職人の手から手へと受け継がれてきたこれらの「わざ」は、花街をはじめ京都の雅な文化の中で洗練され、精緻を極めてきた。 このように花街では、至るところに京都の多彩な伝統工芸を見ることができ、高い技術を誇る京都の伝統工芸が花街の文化を支えていると言える。また同時に、花街における伝統工芸に対する需要は、ものづくり都市・京都の活性化につながり、このことは日本文化の継承・発展にも寄与していると言える。 <花街を支える「ひと」「わざ」「もの」の具体例> 「きもの」 正装の黒紋付や京友禅などの季節を感じさせる装いで、花街を華やかに彩る。 「帯」 西陣織などの舞妓の「だらりの帯」は、2本の帯端が足元近くまで垂れ下がった長いもの。帯の下端には舞妓を預かる置屋の紋が入る。 舞妓は、紋付以外のきものには「ぽっちり」（普通の帯留めに比べて大きく、装飾も珊瑚や翡翠などがあしらわれ豪奢）という帯留めをする。 「かんざし」 舞妓の髪を飾る精巧な細工の「かんざし」は、季節に合わせて毎月変わる。お正月や祇園祭、顔見世など行事に合わせたものもある。 「かつら」 舞妓の髪型は地毛で結うが、芸妓になると「かつら」に替わる。髪型は「島田」 「おこぼ」 舞妓だけが履く、高さ10センチほどある桐でできた履物。「こっぼり」と風情ある音を響かせ、舞妓独特のおぼこさを演出する。 「白粉（おしろい）・紅」 芸妓や舞妓の化粧は、髻付油で下地を作り、その上に水で溶いた白粉を刷毛に付けて塗る。紅は水溶きのものを使う。 「籠」 小物を入れるのは籠。中には扇子、櫛、紅、鏡などが入っている。
--	---

	「名刺」 芸妓や舞妓が使う季節の柄などが入った木版手刷りの名刺。最近では、シール状の「千社札」が名刺代わりに使われることが多い。 「扇子」 芸妓や舞妓が帯に挟んで常に携帯する扇子のほか、舞のときに使う舞扇がある。 「団扇」 初夏の挨拶として、料理屋などのお得意先に配られ、芸妓や舞妓の名前が入った華やかな「京丸うちわ」が店先を飾る。 「邦楽器」 三味線、小鼓、大鼓、太鼓、笛など 「髪結い師」 舞妓の髪は地毛で結う。「割れしのぶ」（舞妓初期）、「おふく」（舞妓3年目位から）、「先筭（さっこう）」（衿替えの前）といった年数に応じて変わる髪型のほか、「奴島田」（正月や八朔などの正装用）、「勝山」（祇園祭の時）といった特別な髪型もある。 「着付師」 芸妓や舞妓の衣装の着付をする人。「男衆」のいる花街では男衆の仕事である。 「男衆」 着付だけでなく、店出し、衿替えなどの儀式の際に一緒に挨拶に回るほか、芸妓や舞妓の身の回りの世話をする。現在では、祇園甲部に5人程しかいない。 「化粧師」 舞踊公演時などに芸妓や舞妓の化粧を担当する人
	＜現状と課題＞ 京都の「ひと」「わざ」「もの」が花街を支えるとともに、花街における需要が、それらを支えているという側面もある。そのため、その需要の低下は京都の伝統産業にも影響を与えている。髪結い師や着付師など、花街の文化を支える後継者の不足も危惧されている。

花街に伝わる 伝統行事	花街には京都の伝統的な風習が伝わるとともに、花街独自の行事が行われ、移り変わる四季を彩っている。また、芸妓や舞妓が京都の伝統行事に参加するなど、その継承の一翼を担っている。 <五花街に伝わる伝統行事の具体例> 「始業式」 (祇園甲部、宮川町、先斗町、祇園東／1月7日、上七軒／1月9日) 新年を迎え、芸妓や舞妓が、正装の黒紋付に、縁起物である稲穂のかんざしをつけ、関係者に挨拶を交し、その年の精進を誓う。また、芸事によく精進した芸妓や舞妓、前年の成績の良いお茶屋などの表彰式も行われる。 「お化け」(節分) 節分の日、芸妓や舞妓は八坂神社や北野天満宮で舞の奉納や豆まきを行い、その夜には、仮装で笑いを誘い、福を招く。もとは厄払いのための町衆の風習が今も花街に残っている。 「八朔」(8月1日) 芸妓や舞妓が師匠やお茶屋に日頃の感謝の気持ちを伝える行事。 「八朔」とは「八月朔日(1日)」のこと。農家で古くからあった初穂を恩人などに贈る風習が武家や公家にも広まり、日頃お世話になっている人に贈り物をするようになったとされる。 「顔見世総見」(12月初旬) 南座での顔見世興行中の5日間、芸妓と舞妓が揃って観劇する。その華やかな光景は、「顔見世」のまねきとともに、京都の師走に彩りを添える。 「事始め」(12月13日) 正月の準備を始める日。お世話になった方々のもとへ鏡餅を納め、一年の御礼と新年に向けた挨拶をする。 <それぞれの花街に伝わる伝統行事の具体例> 「初寄り」(祇園甲部／1月13日) 祇園甲部の芸妓と舞妓が師匠宅に集まり、新年の挨拶をするとともに、一年間稽古に励むことを誓う。 「かにかくに祭」(祇園甲部／11月8日) 祇園を愛した大正・昭和期の歌人・吉井勇を偲ぶ行事
------------------------	--

	「おことうさん・おけら火」(祇園甲部, 宮川町, 祇園東／大晦日) 芸妓と舞妓がお茶屋に「おことうさんどす」と年末の挨拶にまわる。お茶屋は舞妓に小物が入った福玉を渡す。夜には八坂神社に詣で、おけら火をもらう。 昔はたくさんの福玉を持ち歩く舞妓の姿が見られたが、現在は、京都以外の出身者が多くなり、郷里に帰る舞妓が増え、あまり見られなくなっている。 ＜花街が参加する伝統行事の具体例＞ 「梅花祭」(上七軒／2月25日) 北野天満宮の祭神である菅原道真公の命日に行われる祭典。北野天満宮境内にて、上七軒の芸妓と舞妓による野点茶会が行われる。 「平安神宮例大祭奉納舞踊」 (祇園甲部, 宮川町, 先斗町, 祇園東／4月16日) 平安神宮の春の例大祭。16日に舞の奉納が行われる。 「観亀神社宵宮祭」(祇園東／5月中旬) 観亀稲荷神社の宵宮祭に祇園東の芸妓や舞妓が参加する。 「祇園祭・花傘巡行」(祇園甲部, 宮川町, 先斗町, 祇園東／祇園祭) 八坂神社の氏子として、7月24日の「花傘巡行」に参加するなど、祭を盛りたてる。 「時代祭」(10月22日) 時代風俗行列に各花街が交代で参加し、小野小町や清少納言、巴御前などの役を担う。 「献茶祭」(上七軒／12月1日) 1587年に豊臣秀吉が催した「北野大茶会」にちなんで北野天満宮で行われる大茶会。その副席の一つが上七軒歌舞練場に設けられる。
	＜現状と課題＞ 花街の伝統行事には、花街独特のものもあるが、京都の古い伝統を受け継いでいるものもあり、京都の伝統文化の継承に花街が担っている役割は大きい。京都のまちを彩る風物詩を大切に引き継いでいく必要がある。

花街の まちなみ	古くは 100 年以上の歴史のある歌舞練場をはじめ、お茶屋や置屋、女紅場といった稽古場など、これら花街を構成する伝統的な建築物群は、京都を代表する歴史的景観として、風情あふれるまちなみを形成している。 市街地景観整備条例の制定などの京都市の取組のほか、各花街の地域におけるまちづくり委員会等の設置※など、まちなみ保全に向けた自主的な取組が進められている。 ※ 1996 年（平成 8 年）に「祇園町南側地区協議会」、2003 年（平成 15 年）に「上七軒まちづくり委員会」、2009 年（平成 21 年）に「先斗町まちづくり協議会」（「先斗町の将来を考える集い」を改名）が発足している。 （参考） < 歌舞練場 > 祇園甲部歌舞練場、宮川町歌舞練場、先斗町歌舞練場、上七軒歌舞練場、祇園会館 < 文化財指定等の状況 > ・国登録有形文化財 祇園甲部歌舞練場（本館、別館、玄関、正門） ・歴史的風致形成建造物 祇園甲部歌舞練場、上七軒歌舞練場 ・京都を彩る建物や庭園（認定） 先斗町歌舞練場 ・地区指定による景観保全 祇園新橋伝統的建造物群保存地区（祇園甲部） 祇園町南歴史的景観保全修景地区（祇園甲部、宮川町） 上京北野界わい景観整備地区（上七軒）
	< 現状と課題 > お茶屋などの伝統的建築物が少なくなっており、まちなみとして残っている花街の歴史的景観を保存していく上で課題となっている。また、歌舞練場の老朽化など、伝統的建築物の維持が、花街にとって大きな負担となっている。

花街のおもてなし	花街のおもてなしは、芸妓や舞妓の芸やお座敷遊び※１など、客も参加しながら宴席を和ませる独特の文化である。 芸妓や舞妓，料理などの手配，座敷のしつらえなど，お客の好みや利用目的に応じたおもてなしを提供するお茶屋※２，舞妓らを住ませ，芸事やしきたりを教えるとともに，要請に応じてお茶屋などに派遣する置屋，そして，宴席の料理を提供する料理屋や仕出し屋など，それらが協働して花街のおもてなし文化を支えている。 芸妓や舞妓が女紅場などの稽古場で芸を磨くなど，五花街が互いに競い合い，花街全体がおもてなし文化の向上に努めている。また，公益財団法人京都伝統伎芸振興財団（おおきに財団）も花街の伝統伎芸の保存・継承に大きな役割を果たしている。 お茶屋の一見さんお断りといった慣行も，お客のことをよく知ること，より高いレベルのおもてなしを提供するためであり，おもてなしを受ける側も，花街の文化を支える一員として，お茶屋との信頼関係を築き，さらに，より深く芸を楽しむため，伝統伎芸に対する見識を深めることも求められる。 ※１ お座敷遊びとしては，「とらとら」などのジャンケン，三味線を使う「金毘羅船々」，扇子を使う「投扇興」などがある。 ※２ 花街では，座敷でのおもてなしの場は本来お茶屋であるが，最近では料理屋やホテルに芸妓や舞妓を招いて行われる宴席も多くなっている。
	<現状と課題> 様々な人によって支えられ，受け継がれている花街の文化にとって，芸妓や舞妓を育てる置屋やお茶屋の減少は，花街の仕組そのものを揺るがしかねない問題である。また，おもてなしを受ける客も，花街の文化を支える一員であるが，芸を理解し，芸の目利き役として芸妓や舞妓の成長を見守ることができる客が最近では少なくなっている。

＜各花街の紹介＞

現在、京都花街組合連合会に加盟している花街として、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街があり、総称して五花街と呼んでいる。

花街名	概 要
祇園甲部 	四条通を挟んで北は新橋通，南は建仁寺通，西は大和大路通，東は東大路通に囲まれた花街。八坂神社の門前町として栄え，現在でも江戸時代の茶屋建築の面影を残す風情あるまちなみが独特の情緒を形作っている。 祇園甲部歌舞練場において，春に「都をどり」，秋には「温習会」の公演を行う。京舞井上流
宮川町 	鴨川の東側，四条通の南側から五条通までの花街。八坂神社の御輿洗いが行われていたことから宮川という名がついた。江戸時代には出雲阿国の歌舞伎公演が行われ，芝居町や茶屋町として発展し現在に至る。 宮川町歌舞練場において，春に「京おどり」，秋に「みずゑ会」の公演を行う。若柳流
先斗町 	鴨川と木屋町の間，三条から四条に至る通りの花街。その名の由来には，ポルトガル語のポント（「先」の意味）など諸説ある。先斗町歌舞練場は三条大橋近くにあり，鴨川からその存在感ある佇まいを眺めることができる。 先斗町歌舞練場において，春に「鴨川をどり」，秋に「水明会」の公演を行う。尾上流
上七軒 	北野天満宮の東，千本釈迦堂の西にある花街。室町時代に，北野天満宮の造営に使った残木で七軒の茶屋を作り，参拝客の休憩所とした。その七軒茶屋に豊臣秀吉が茶屋株を公許したのがお茶屋の始まりとも伝えられる。 上七軒歌舞練場において，春に「北野をどり」，秋に「寿会」の公演を行う。花柳流
祇園東 	祇園甲部と同じく八坂神社の門前町として江戸時代から栄えてきた花街。1881年（明治14年）に，四条花見小路北東部（四条通り以北，花見小路以东）が祇園東に区分され現在に至る。 歌舞練場である祇園会館において，秋に「祇園をどり」の公演を行う。藤間流

【もう一つの花街 ～島原～】

内容・特徴
当初は二条柳馬場に開かれ、その後六条三筋町に移転し、さらに 1641 年に現在の地に移された。急な移転騒動が、当時の島原の乱に似ていたことから、島原と呼ばれたとも言われている。 遊宴だけでなく、和歌や俳諧などの文芸活動が盛んで、江戸中期には島原俳壇が形成されるほどの活況を呈した。1873 年（明治 6 年）に開設された歌舞練場において「青柳踊」や「温習会」が上演され、京都の六花街の一つに数えられていた。また、太夫道中※1 や「かしの式」※2 などの独自の文化を今も継承している。 島原には、揚屋※3 と置屋があり、揚屋は太夫や芸妓などをおもてなし、置屋から太夫等呼んで宴会を催していた。 揚屋であった角屋の建物は、揚屋建築唯一の遺構として、1952 年（昭和 27 年）、国の重要文化財に指定。また、置屋の輪違屋は京都市指定文化財、東の玄関であった島原大門は京都市登録文化財である。その大門から続く島原の道が石畳風に整備され、歌や俳句を記した文芸碑とともに、まちの風情を醸し出している。 ※1 「太夫」とは、傾城（けいせい 官許により宴席で歌舞音曲をもって接待する女性）の最高位。客層に公家が多かったため、歌舞音曲、茶道、華道のほか、和歌、俳諧、さらには、囲碁や双六などにも長けていた。 「太夫道中」とは、着飾った太夫が、禿（かむろ）、引船（ひきぶね）などの多くの付人を連れて、差しかけ傘で内八文字を踏みながら置屋から揚屋へ練り歩くこと。 ※2 太夫を置屋から呼び、客に紹介する式。太夫が盛装を凝らして盃台の前に座り、盃を回すしぐさを見せている傍らで、仲居が太夫の名前を呼んで客に紹介する。 ※3 現在の料理屋にあたり、二階へ客を揚げることから「揚屋」と呼ぶようになった。江戸中期以降、「揚屋」は、大座敷とそれに面した広庭、茶室、寺院の庫裏と同規模の台所を備える大宴会場へと発展し、明治以降、お茶屋業に編入された。

＜島原の太夫が参加する伝統行事の具体例＞

「宝鏡寺ひなまつり」（3月1日）

宝鏡寺で行われるひなまつりにおいて、太夫の奉納舞が披露される。

「吉野太夫花供養」（4月第2日曜日）

島原の名妓であった吉野太夫の墓がある常照寺で行われる。近くの源光庵から常照寺本堂まで太夫道中が行われる。

「夕霧供養」（11月第2日曜日）

島原から大阪の名妓となった夕霧太夫の墓がある清涼寺で行われる。本堂前から三門まで太夫道中が行われる。

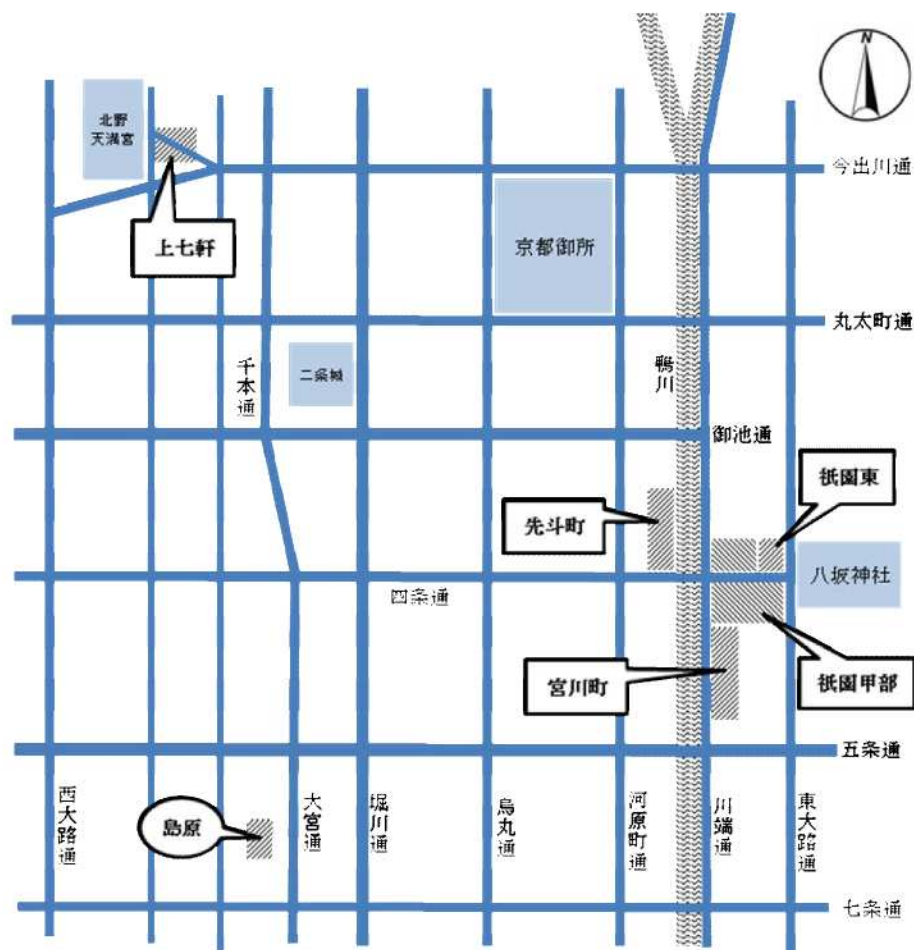
＜現状と課題＞

島原は、1976年（昭和51年）、京都花街組合連合会を脱会した。置屋である輪違屋が1872年（明治5年）からお茶屋を兼業しており、現在島原でお茶屋営業を行っているのは輪違屋のみである。

太夫も数人となり、太夫文化の継承が課題となっている。

(参考資料)

花街の位置図



五花街のお茶屋件数・芸妓舞妓人数の推移 (各年1月末現在)

